連載61

内海善雄（ITU前事務総局長）の

やぶ睨み「ネット社会」論

勇ましいだけが安全保障のすべてではない

高遠菜穂子さんのことを覚えておられるだろうか？　二〇〇四年、イラクで孤児の面倒をみていた彼女が武装勢力に人質にされ、解放の条件として自衛隊のイラクからの引き揚げが要求された。彼女は無事救出された。しかし、日本政府の渡航自粛勧告や退避勧告を無視して誘拐されたことや、家族が自衛隊の撤退を政府に要求したこと、救出後の会見で「またイラクへ行き、援助活動をしたい」と発言したこと等で、マスコミや世間の大きな反発を招いた。

日本で言語道断も、世界ではヒーロー

「こんな女に日本政府が危険を冒し、多額の経費を使う必要はない。すべて彼女の自己責任だ」というものであった。私は当時ジュネーブに在住していたので、日本での騒ぎは直接肌で感じることはできなかった。だが、「フィナンシャル・タイムズ」などにも大きく報道され、嫌でも関心を持たざるをえない状況だった。

欧米のメディアは、日本とは逆に、彼女を「人質になってもくじけず、なお援助活動をしたいという素晴らしい日本人」と褒め称えた。私も日本人として国際社会で鼻高々だった。

内向きで、現状維持が基本の日本社会では、人に迷惑をかけることが一番嫌われ、そのかわり自分もそれほど人の面倒をみない。皆ひっそりと暮らすというのが長く続いた社会秩序維持の方法である。お上の指示に逆らって危険なところへ行った者を、どうして多額の経費や犠牲を払って救出しなければならないのか。「まして、懲りもせず、まだ迷惑をかけようとしている。言語道断だ」となる。

一方、西欧社会では、多くの人は、リスクをとって、どんどん外へ行き、生活範囲や可能性を拡大していく。危険をものともせず目的に向かっていける者は、ヒーローだ。そして、「危ない目にあっても、なおひるまず崇高な人道活動を行う意欲を持っているのは、まさに聖人」となる。

痛ましい犠牲となった後藤健二氏は、今のところ後者の扱いを受け、惜しまれている。いよいよ日本人の発想も欧米並みになったのだろうか？

しかし一方、湯川遥菜氏が殺害された時にヨルダンの市民はお祈りをして死を悼んでくれたが、日本ではどうだったか？　ヨルダンのパイロットの無残な死が報道された時、日本の人たちはどうしただろうか？　まさしく前者の「我関せず」の日本人的な対応ぶりではなかったろうか。

親日のアラブ諸国

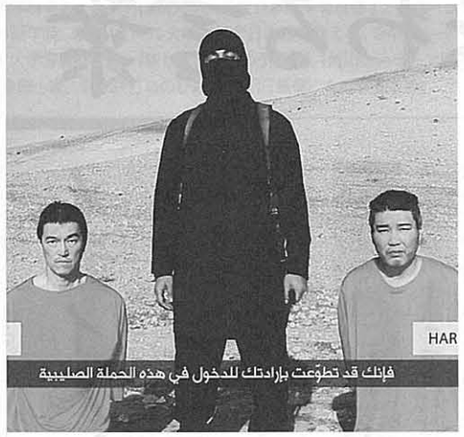
私は、十五年前、インドネシアから立候補した強力な候補を、アラブ諸国からの強い支持を得て破り、ＩＴＵ事務総局長選挙に当選した。そして、八年間の任期中も同地域の多くの人たちと交友があった。彼らは「お前は、欧米人とは異なる同朋のアジア人だ」と親しみを持って語りかけてくるのであった。

彼らの親日感情は、アラブ地域を収奪した欧米とは異なる日本、欧米に負けずに成功を収めた勤勉なアジア人、平和憲法を堅持して人道支援を行う日本というものが根っ子にある。こちらはなかなか理解しがたいイスラム教徒だと思っているのに、向こうはこちらを兄弟のように思ってくれているのである。

今回の事件は、アラブ諸国とのこのようなムードを一変させたように思う。専門家は、「すでに戦争、敵は国内にもいる」などと警鐘を鳴らす。政府はテロ対策推進本部を立ち上げ、情報の収集・分析や在外邦人保護策の強化を打ち出し、海外の日本人学校の警備の強化など慌てふためいている。

安倍晋三総理は「罪を償わせる」などと怒りをぶちまけ、海外メディアからは「日本では異例な（強い）表現だ」とまで報道される。また、テロ対策のためにも憲法改正が必要だとの動きも弾みがついているようだ。

これら一連の、力を背景とした態勢強化の動きは、無論テロリストに対するものであり、万全の備えが必要なことは疑いない。しかし、アラブ系の人々はもとより、外国人一般との間でも緊張感が高まることは避けられまい。過剰な警戒心は国際化の逆を進むことにもなりかねない。



これまでの日本、これからの日本を考えさせる事件だ

一方、野党や一部の識者からは、政府批判が一気に噴き上げた。首相のこの時期の、ことさら「ＩＳＩＬと戦う周辺各国を支援する」との発言が、テロリストを挑発したのではないかというのである。

日本外交の伝統を守れないのか？

ここで冷静に思い起こさなければならないことは、なぜ、今まで日本国や日本人がテロの標的になることが少なかったのかということではないか。

それは第一に、戦後七十年間、国際社会の中では非現実的ともいえる平和主義を貫き、人道支援に力を注いできたことであると思う。湾岸戦争の資金協力や、インド洋の洋上補給活動など、必ずしも人道支援のみというわけにはいかなかった現実もあるが、この日本のとってきた（あるいは、とらされてきた）超お人好しの外交が、それなりに世界中で受け入れられ、敵を作らなかったという事実を否定はできない。

さらに、今までのテロリストはアラブ地域出身が多かったため、アラブ世界に共通的な親日的な雰囲気も大いに寄与しただろう。

第二に、リスクはとらない、危険なところには近寄らない、という臆病な国民性から、そもそも日本人がテロ事件に遭遇する機会が物理的にも極めて少なかったことである。要するに、日本人を標的にしようにも近くにはいなかったのである。

テロリストは厳然たる態度で徹底排除しなければならない。しかし、戦後レジームからの脱却を目指すあまり、この日本の特異な優位性を看過してはいないだろうか。この優位性は決して恥ずべきことではなく、国家として誇るべき強みであると思う。戦後、営々と築いてきたユニークな日本の強みを失えば、ただの普通の国となり、失いがちな日本の国際的地位がますます低下すると思う。

この地球上で生きていくためには、勇ましさだけでは駄目で、他国からの尊敬の念や、経済力、はたまた、したたかさなどがバランスよく兼ね備わって初めて国家としての安全保障も確保できるのだと思う。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。ＩＥＥＥ名誉会員。